Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-26

現代中国社会のダイナミズムに関する試論的枠組み（特集 現代アジアから日本をみる）

佐々木, 衛

(Citation)
社会学雑誌,18:1-15

(Issue Date)
2001-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010960

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010960

KOBE UNIVERSITY

現代中国社会のダイナミズムに関する試論的枠組み

佐々木　衛
神戸大学文学部教授

本論は、現代中国社会の変容を読み解くための枠組みを試論的に提示することに目的がある。一九八〇年代後半から、中国人研究者はむろん、外国人による実証的な中国研究も蓄積されてきた。すでに一〇数年を経て、研究の総括も始まってきた。中国社会の構造変動にかんする共同研究も、成果をシリーズとして出版するまでになっている[1]。中国社会を全体的に把握するための枠組みの検討が試みられる段階に到達したと考えることができよう。しかし、全体的に把握するための枠組みは、統一されたものを構想するのではなく、おのおのの関心と視点によって、対象と次元を異にする様々な試みとして構想されるべきものであろう。研究を見通す枠組み、調査研究の指針、そして資料を読み込む「ストーリー」として機能するので、暫定的、可変的な仮説的構成となるものであろう。論者はこうした仮説的理論枠組みを明示的に提出して、枠組み間の関連を位置付けていくことで、複層的な、そして多角的な立体像を得ることができるのではないかと考える。

さて、筆者は北京に近接する二つの村落を対象に、社会構造とその変容を一九三〇・四〇年代から現代にいたる時間の流れの中で検討している[2]。一つは比較的大きな村落で、かつては盛大な廟会が催され周囲の村の中心的な役割を果たした。もう一つは隣接する集落と一つの村とみなされた時期もある、比較的小さな集落である。二つの村落は五〇〇メートルしか離れていないが、一九八〇年代の経済の開放政策に対する対応はまったく異なっていた。前者は、解放後まもなくから北京の企業の下請けとして工場を経営し、これを土台に現在も村落による集団的企業経営を維持している。これに対して、後者は、請負制度が始まると、個人経営による経済発展を選択した。元来、企業の集積は大きくなかったという条件もあろうが、村の二カ所の工場を請負に出し、村としての集団経営を早くからやめてしまっている。一九八〇年代以降の村落社会の発展の道は、それに先行する条件に左右されざるを得ないが、こんなに近くにある二つの村落がまったく異なった選択をしたことは、筆

者の関心を引いたところであった。中国社会の変容の多様性、そして現代村落社会としての構造や機能の特質などを、二つの村落を対象に検討するとかなりのことが分かるのではないかと考えている。

では、中国の村落社会の変容をどのような視点から考察することができるのであろうか。現地に入り、資料を収集する基本的な研究枠組みをどのように構成したらよいであろうか。まず、先行研究をサーベイしながら、われわれの基本的な視点をさらに深化させるよう検討してみよう。

I　現代中国社会にかんするモノグラフ研究

現代中国社会のモノグラフ研究は、一九八〇年代に新しい進展をみせている。外国人研究者は中国研究者との共同研究という形式をとらざるを得ないが、対象地域に直接足を踏み入れることができるようになり、自分の目で見、耳で聞き、そしてノートを取ることもかなり自由になった。現地での直接体験は研究のイマジネーションを広げ、試論的な仮説の検証が可能になってきた。この一〇数年間にどのような関心から研究してきたのか、われわれの関心を位置づけるために、まず概括してみよう。

解放後に記述されたモノグラフ研究を著者が対象社会に身を置いた時期と記述された時期にしたがって区分すると、（一）第一期：一九三〇年代から土地改革期に中心がある モノグラフ、（二）第二期：文化大革命期を中心に描いたモノグラフ、（三）第三期：人民公社解体後のモノグラフの三つに区分することができる。土地改革時を対象に記述したモノグラフは早くとも一九五〇年代後半、多くは一九六〇年代に出版されている。文化大革命期のものは一九八〇年代に対象地に入り資料を収集しているのがわかる。人民公社解体後の社会をテーマとしたモノグラフは一九九〇年代になって出版されている。

代表的な研究成果は、以下の様に整理できるであろう。

（一）一九三〇年代から土地改革期を描いたモノグラフ研究

福武直　一九四六『中国農村社会の構造』大雅堂（福武直著作集第九巻、東京大学出版会、一九七六）

旗田巍　一九七三『中国村落と共同体理論』岩波書店

Lin, Yue-hwa 1947, *The Golden Wing : A Social Study of Chinese Familism.*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.

佐々木衛編　一九九二『近代中国の社会と民衆文化―日中共同研究・華北農村社会調査資料集』東方書店

Huan, Philip C. C. 1985, *The Peasant Economy and Social Change in North China.*, Stanford University

Press : California.

Yang, Ch'ing-kun（楊慶堃）1959, *A Chinese Village in Early Communist Transition.,* Massachusetts Institute of Technology Press : Cambridge.

Crook, Isabel and David 1959, *Revolution in a Chinese Village : Ten Mile Inn.,* Routledge & Kegan Paul Ltd : London.

Crook, Isabel and David 1966, *The First Years of Yangyi Commune.,* Routledge & Kegan Paul Ltd : London.

Crook, Isabel and David 1979, *Mass Movement in a Chinese Village : Ten Mile Inn.,* Routledge & Kegan Paul Ltd : London.

Myrdal, Jan 1965, *Report From a Chinese Village.,* Pantheon Books.（三浦朱門・鶴羽伸子訳『中国農村からの報告』中央公論社　一九七三年）

Hinton, William 1966, *FANSHEN : A Documentary of Revolution in a Chinese Village.,* Monthly Review Press.（加藤祐三・春名徹・加藤幹雄・吉川勇一訳『翻身 ―ある中国農村の革命の記録』平凡社　一九七二年）

Edward Friedman／ Paul G. Pickowicz／ Mark Selden 1991, *Chinese Village, Socialist State.,* Yale University Press : New Haven & London.

Siu, Helen 1989, *Agents and Victims in South China : Accomplices in Rural Revolution.,* Yale University Press : New Heaven.

（二）文化大革命期を描いたモノグラフ研究

Froric, Michael B. 1980, *Mao's People : Sixteen Portraits of Life in Revolutionary China.,* Harvard University Press : Cambridge.

Chen, Anita／ Madsen, Richard & Ungar, Jonathan 1984, *Chen Village : The Recent History of a Community in Mao's China.,* The University of California Press.（小林弘二監訳『チェン村 ―中国農村の文革と近代化』筑摩書房　一九八九年）

Huang Shu-min 1989, *The Spiral Road : Change in a Chinese Village Through the Eyes of a Communist Party Leader.,* Westview Press.

聶莉莉　一九九二『劉堡』東京大学出版会

（三）人民公社の解体以後に主要な関心をもつモノグラフ研究

王暹寧　一九九一『当代中国村落家族文化 ―対中国現代化的一項探索』上海人民出版社、上海

陸学芸主編　一九九二『改革中的農村与農民 ―対大寨、

劉庄、華西等一三箇村庄的実証研究』中共中央党学校出版社、北京
William, Byrd A. and Lin, Qingsong（ed.）1990, *China's Rural Industry : Structure, Development, and Reform.*, Oxford University Press.
Bruun, Ole 1993, *Business and Bureaucracy in a Chinese City : An Ethnography of Private Business Household in Contemporary China.*, China Research Monograph : 43, Institute of East Asian Studies, University of California.
賈鎩・秦小相　一九九三『社会新群体探秘―中国私営企業主階層』中国発展出版社、北京
張厚義・劉文璞　一九九五『中国的私営経済与私営企業主』知識出版社、北京
王銘銘　一九九七『社区的歴程―渓村漢人家族的箇案研究』天津人民出版社、天津
折暁葉　一九九七『村庄的再造―一箇〝超級村庄〟的社会変遷』中国社会科学出版社、北京
中兼和津次編著　一九九七『改革以後の中国農村社会と経済―日中共同調査による実態分析』筑波書房
細谷昂ほか　一九九七『沸騰する中国農村』お茶の水書房
張楽天　一九九八『告別理想―人民公社制度研究』東方出版中心、上海
園田茂人編著　一九九八『証言・日中合弁』大修館書店
Yan, Yunxiang 1996, *The Flow of Gifts : Reciprocity and Social Networks in a Chinese Village.*, Stanford University Press : California.
三谷孝編　一九九九・二〇〇〇『中国農村変革と家族・村落・国家』第一・二巻　汲古書院
三谷孝ほか　二〇〇〇『村から中国を読む』青木書店

（四）その他の中国社会モノグラフ研究

Fei, Xiao-tong（費孝通）*1939, Peasant Life in China : A Field Study of Country Life in the Yangze Valley.*, Routledge and Kegan Pault : London.（仙波康雄訳『支那の農民生活』生活社、東京　一九三九年）
費孝通　一九四七『郷土中国』上海観察社、上海
中国農村慣行調査刊行会編　一九五二―五八『中国農村慣行調査』全六巻　岩波書店
旗田巍　一九七三『中国村落と共同体理論』岩波書店
Freedman, Maurice 1958, *Lineage Organization in Southeastern China.*, The Athlone Press of the University of London.（末成道男・西沢治彦・小熊誠訳『東南中国の宗族組織』弘文堂　一九九一年）
Freedman, Maurice 1966, *Chinese Lineage and Society : Fukien and Kwung-dong.*, The Athlone Press of the

University of London.（村田克己・瀬川昌久訳『中国の宗族と社会』弘文堂　一九八七年）
滋賀秀三　一九六七『中国家族法の原理』創文社
Kuhn, Philip A. 1970, *Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China : Militarization and Structure, 1796 - 1864.*, Harvard University Press : Cambridge.
Elvin, Mark 1973, *The Pattern of the Chinese Past : A Social and Economic Interpretation.*, Stanford University Press : California.
Fried, Morton H. 1974, *Fabric of Chinese Society : A Study of the Social Life of a Chinese County Seat.*, Octagon Books : New York.
Cohen, Myron L. 1976, *House United, House Divided : The Chinese Family in Taiwan.*, Columbia University Press : New York and London.

以上の研究成果の列挙から、次のことが読みとれる。(3)

①ここで取り上げたモノグラフ研究は、対象地域を一ヵ村か小地域に限定している。また、モノグラフの登場人物は固有名詞で語られている。このように限られた対象を生き生きと詳細に描くことで、地域で生起した事件を読者は豊かなイマジネーションで読み解くことができる。また、モノグラフの記述はある特定の側面に偏向していることも多いが、全体としてみると、個々のモノグラフが互いに共鳴しあって、中国社会の全体像を構成するのである。ここに挙げたモノグラフ研究は読者に豊かなイマジネーションを喚起する力を失っていない。対象地域に比較的自由に足を踏み入れることができるような時期に来ても、その時代の詳細な記録としての価値は損なわれていない。

②第一期と第二期のモノグラフは、村落社会の変動に関するルポルタージュの性格が強く出ている。社会主義革命という多くの人が予想しなかった、あるいは社会主義的価値を実現するユートピア的運動とも考えられた事態が進行するのに直面して、その過程を詳細に報告することに努めている。底辺から社会を改造しようという渦巻くエネルギーは観察者を圧倒したに違いない。親族、郷紳階層、民間信仰集団などの多元的な構造が共産党国家権力の中に一元化していくドラスティックな過程をつぶさに描くことに関心は集中している。しかし、革命後は外国の研究者が中国農村に足を踏み入れることがほとんど不可能になった。一九四九年以降は直接見聞することがほとんど不可能になった。『チェン村』の著者たちのように、香港に移住した人たちに対するインタビューでも、垣間見る情報は現実に起きている事実を推測するイマジネーションをかき立ててくれたのである。情報が制限され、間接的にしかうかがうことができなくなるほど、限られた情報の中から事実に近いものを描こうと

する関心は高くなっていた。

③第二期になると、中国社会の社会主義的改造の現実は理想とずいぶん隔たっていることが外部に具体的に伝わってきた。文化大革命の熱狂と運動への倦怠、権力の恣意的な濫用、生産の逓減と人為的な貧困という現実が「竹のカーテン」の隙間から漏れてくる。そして伝統的な支配権力の解体、家族的構造秩序の排除、これに代わる社会主義的価値秩序の建設など、革命的な政策の実施と社会の変革にも関わらず、人々の行動の規範の中には伝統的な観念や習慣は持続するという現実が次第に鮮明になったのである。こうした事実の前に、中国社会の構造的原理としての家族主義や縁故主義、あるいは権力の濫用と暴力を生み出す社会構造の検討が研究テーマとなっている。社会主義革命の中で伝統的な構造、観念、行動スタイルの持続と変容という課題、さらに、革命的な活動は伝統的な観念や行動スタイルによって支えられていたのではないかという試論的仮説の検証が、社会学的・社会人類学的なテーマの中心となった。

④第三期には中国社会の変動に伴う新しいテーマが関心を引き起こしている。経済改革によって生まれた企業家の社会的位置づけ、社会移動と中間層の形成、都市と農村との関係、産業化や企業改革と社会保障システムの改革、ジェンダー、高齢化社会、国家と社会の存立など、社会学が本来中心としてきたテーマが正面から取り組まれるようになった。しかし、中国社会の基礎構造、社会構造と秩序の論理の検討は、中国社会の研究にとって欠かすことができないテーマであることには変わりはない。「社会主義的な市場経済」という社会改造の基本中心も、中国社会の構造的特質が現代的な社会秩序としてどのような具体相を持つかというテーマとして社会学的に捉え直される。改めて、「伝統」の継続と変容というテーマが新しい課題となっているのである。

⑤また、第三期の研究には、従来の短期的な滞在による「訪問調査」の限界を突破した業績が蓄積され始めたことが強調されるであろう。三谷孝らの業績は、満鉄調査部の『中国農村慣行調査』を引き継ぐものだが、調査対象村落の追跡調査にとどまらず、解放後の五〇年間の村人の経験を詳細に記述している。とりわけ文化大革命期にかかわる事項の記録は、村人との信頼関係が不可欠だが、長期に渡る継続的な調査によってのみ可能となったであろう。中国農村調査の新しい可能性を切り開くことができたと評価できる。

Ⅱ　中国社会の構造をどのように見るか

（一）

以上の研究動向に見たように、研究関心は中国現代社会の動向に大きく左右されてきたが、中国社会に関心を持つ多くの研究者は、激変する位相の裏に、変動を越えて沈潜する位相が複雑に複合している現実を見ようとしてきた。言い換えれば、変容する表層と変容を規定する基層の複層的構造に関心を引きつけられてきたといってよいであろう。このような社会の複層的な構造を見ることによって、中国の、あるいはアジアの、そして非西欧社会の変動を構想する手がかりとしてきたのである。

中国社会をフィールドに社会変動論を考察した研究書には、上記に挙げたものの外に次のものが重要であろう。

鶴見和子　一九七七『漂白と定住と―柳田国男の社会変動論』筑摩書房

コーエン、ポール著　一九八四　佐藤慎一郎訳『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』平凡社、一九八八年

溝口雄三　一九八九『方法としての中国』東京大学出版会

宇野重昭・朱通華編　一九九一『農村地域の近代化と内発的発展論―日中「小城鎮」共同研究』国際書院

鶴見和子は社会学者、ポール・コーエンは中国歴史学者、溝口雄三は中国哲学者である。研究のディシプリンが異なるにも関わらず、三者には社会変動を一方向的、直線的、単線的な段階論的にではなく、多系的、複合的なものとして構想する点に共通性がある。

鶴見の社会変動論は柳田国男の『明治大正史世相編』の解読から紡ぎ出されてたもので、社会変動の「垂氷モデル」を構想する。われわれの日常的生活の背後に「原始的心性」が根強く生きて、しかも現代社会に対して一種の賦活力を備えていると主張する。コーエンは基層社会の内的変化と多様性に論究し、「近代化」に限定されないもう一つの道の可能性を「目標開放モデル」として考えようとしている。また、溝口雄三は、地域は固有の歴史的体験、規範の体系、社会構造を共有しており、これを「基体」と呼ぶ。中国近代史を「旧中国」の解体過程としてとらえるのではなく、「旧中国」の脱皮過程としてとらえる「基体展開論」を提示している。三者には近代化の普遍原理とされてきた段階論を相対化し、地域における社会変動の固有性と内在性を捉えようという意図がみられる。

文化人類学者の川田順造は身体技法を例に取り、身体技法の地域的固有性、連続性と可変性を論証している。つまり、身体技法は、第一に同一社会内で構造的な共通性をもつこと、第二に世界観、人生観などの価値意識と文化内的

な関連性をもつこと、第三に「身体的記憶」とでもいうべき身体の無意識的運動連鎖が形成されて、世代から世代に引き継がれる持続性と外的変化に従う可変性をもつと指摘する[4]。川田は「伝統」の連続と変容と見なしているものを身体技法というモノの次元で解明しているが、アスペクトは鶴見の「垂氷モデル」や溝口の「基層展開論」と同じであろう。

では、現代中国の社会変動を概念的に説明する場合、従来「伝統」と呼ばれたり、鶴見和子が「原始的心性」、溝口雄三が「基体」と呼んだものを、どのようにモデル化すれば有効であろうか。本論では、中国社会の集団構造や秩序構造の特性への関心から検討してみよう。

中国社会の特徴として、家族主義、縁故主義・ネポティズム、関係主義、会党主義などの用語で表現されてきたものがある。これらは集団の具体相において表現された用語である。これに対して、費孝通が『郷土中国』（一九四七）で「差序格局」と呼んだものは、集団の構成の論理を社会学的な概念として説明しようとしている。西欧の集団構造がメンバーシップを構成の原理としているのに対して、中国の集団構造は個人的な絆の連鎖として構成されており、集団としての分限が緩やかで伸縮に富んでいることを述べている。

フリードマンは、中国の宗族組織は一方では政治的な力を誇示するためにいくつもの家族集団を連合するベクトルを持つが、他方では、政治的・経済的・社会的な成功を達成した家族は自分たちの直接の祖先を祭祀する集団を分節することで、集団の政治力を確かなものにしようとする、と構造特質を解説している。経済的な豊かさと社会的な力をもつ宗族組織は、内部に分節化を繰り返すことで集団の凝集力を更新している（Freedman, 1958）。フリードマンの宗族組織論の模式を単純化すると、「分化を通した統合」といえるであろう。宗族集団のダイナミックな構造を明らかにすることに主旨がある。

筆者はこれらの視点を引き継いで、集団の構造的な論理の概念的な解釈、そして、社会の変容にともなって規範秩序がどのように持続するか、組み替えられるか、あるいは、人々のエネルギーをどのように方向づけているか、という問題に関心をもっている。この研究の目的からすると、「社会を構成する規範秩序の構造」の位相に関してモデルを概念化してみてはどうかと考える。

（二）

多くの日本人読者は、中国社会のモノグラフを読んでとまどいを感じる人も少なくないだろう。集団が集合的な実態として凝集力を持つ構造に生きている日本人には、個人的な関係として集団が出現する中国社会の現実を理解する

にはイマジネーションが欠けるところがある。細谷昂の研究グループが「中国農村には家が、したがって村もない」と率直な感想をもらしている（一九九七、四〇八）。親族の結びつきは強いようにみられるのに、生活を律する原理は家ではなく個人にある。家族主義と個人主義が表裏一体となって結びあっている、この両者がどのように現実の社会の論理を構成しているのであろうか。イエ・ムラを集合的な実態と研究してきた日本人研究者には、中国農村社会を構成する論理をつかみ出すのは困難であった。満鉄調査部刊行班が一九四〇年から四三年までの足かけ四年にかけて実施した『中国農村慣行調査』（一九五二―五八）、戒能通孝と平野義太郎の論争[5]も、相反すると思われた家族主義・村落の凝集力と個人主義的原理の複層的な姿の前に、どのように向き合ってよいか戸惑いを表している。福武直と旗田巍は中国農村社会の構造の中に結社的性格を読みとっているが、結社的な絆で結ばれた社会がどのような構造と秩序を構成するのかという問題を提起するまでにはいたっていない[6]。

しかし、われわれ日本人にとって中国社会の研究に対する関心は、まさにこの個人的に結ばれる絆のダイナミズムにあるように思われる。中国の民間信仰や民衆運動にたびたび現れるところであるが、運動の広がりの急激さと脆弱さでもある。運動が一度人々を聚集するとたちまち地域を席巻し、県城を占拠したり中央の権力機構を脅かしたりすることもあるが、運動が持続することはまれである。リーダー間の個人的なネットワークの中に活動は組織されているので、地域的な限定を越えて急激に高潮することは容易だが、中核のリーダーが捕捉されると運動はたちまち瓦解する[7]。こうした運動に内在するある種の強さと脆弱さという性格は、費孝通が「差序格局」という用語で説明した集団構造の論理、フリードマンが「分化を通した統合」とモデル化した親族の構造と通底しているのではないかと考える。

（三）

以上で述べた「分化を通した統合」の外に、中国社会の特徴として次のような点が注目される。むろん、これらの項目はわれわれ日本の社会に慣れた者の目に鮮明に引きつけられるところでしかない。また、体系的に検討して整理したものではなく、アトランダムに整理したにすぎない。おのおのの項目の性格を検討する余裕はないし、項目間の関連を厳密に検討してはいない。しかし、これまで議論されてきた中国社会に関連する緒論点を整理しようという目的には、当面、有効であろう。

①過剰人口、移住・移動の高さ
②家産の均分
③権威は系譜関係の中に継承されない、権威の脱中心性

④平等主義、大同主義

⑤社会構成の多層性、社会権力の多元性

まず、過剰人口という問題は多くの論者が注目することであった。Philip Huang は過剰人口と安価な労働力、そして大部分の農家が土地だけで生活できなかったことに中国農業が資本主義的発展をみせなかった要因をみている（1985：293）。土地に頼って生活できない農民は、村外に生活の糧を見いださざるを得ない。また、度重なる旱魃や水害、イナゴなどの害虫の被害は人々を村から流浪させる。華北地域の村落の成立が移住と密接に関わっていることは彼らの多くが共有している山西省洪洞県からの移住伝説に表れているが、清代中期からの東北地域や東南地域の開発にともなう移住もよく知られている事実である。

農家において家産の均分は徹底していた。土地や家屋などの財産はむろん、日常に使用する家具なども息子たちの間で均等に分割された。家産の分割は家族の没落を招くことが多く、「一畝百年転三家」、「富者不恒富」、「窮不過三代、富不過三代」と俗謡があるように、土地の移動と経済的な浮沈は激しかった。商家などでは家産の分割をできるだけ引き延ばそうとするのが、家長の苦慮であったことに間違いはない。『金翼』の物語が語るように、有能な家長のもとでは息子たちがそれぞれの役割を引き受けて、家族の勢力が一層拡大することができた。しかし、結局は分割に及ばざるを得ない[8]。

また、家産が均分されるので、嫡子や長子といえども家譜や位牌を受け継いだ宗家としての威信や義務は顕著ではない。むしろ、個人的な才覚や実力がものをいう秩序を構成した。権威と威信が脱中心的な構造をもつことは、民間宗教の活動によく表れている。Yang, C.K. は、民間宗教結社には統一的な教団組織とハイアラーキカルな権威を発展させなかったと述べている（1961：339）。宗教的な魅力をもった人物が現れると、伝えられている呪術的な儀式や宗教的な教義を組み替えて、彼のもとに新たな宗教集団が組織された。一方では大伝統としての儒教教義の権威と、他方では民衆の間で信仰された宗教の脱中心性とが、現実の両面を構成したのである[9]。

平等主義と大同主義も、われわれ日本人からすると中国社会に顕著にみられる特徴であろう。平等主義と大同主義は次元の異なる概念に違いない。前者は持ち分に関する均等な権利の主張で、家産の均分分割として意識される。財産を共有するものの中での均等をいうのであるから、共有の絆をもたない他者に対して排他的になる。他者を排除した均分、つまり他者に対する格差を同時に意味する。他方、大同主義は「天下の公」といった集団の個別性、閉鎖性、排他性を突き抜けたところに思考されるものであろう。中国的な共存、平等、公平を裏付ける原理である[10]。両者は異

なる次元をもつが、しかし、生きる者の論理として持ち分の均分と生きる権利の平等として分かち難く結びつくところがあるようだ。王朝の後退期に幾たびも間歇的に勃発した民衆反乱では、「均田均糧」というスローガンとして現れ、人々のエネルギーを摑んだのである。

社会構成の多層性と社会権力の多元性は、村の社会生活によく表れる。村のほぼ半数の家族は土地に頼っては生活できなかった。長工や短工として働きに出るか、商店の店員となったり、手仕事に就いたりして何とか家計の辻褄を合わせていたのである。こうした家族には一族に頼る術もないことが多い。社会の底辺に身を寄せ合うより外はなかったのである。村の仕事や行事は、郷紳と呼ばれた社会的に地位のある男たちによって、彼らの中の暗黙の了解のうちに運営された。しかし、社会の底辺に生きる人々も、社会生活からまったく脱落していたのではない。中国でもっとも愛読された小説が『三国志演義』や『水滸伝』であったように、「弱きを助け、強きを挫く『好漢』」の兄弟的義合は民衆の規範として憧憬を集めていた。清末から一九三〇・四〇年代の社会秩序が溶解した時代には、「一貫道」などの会党や「在家里」などの教門、あるいは「八拳」などの武術集団が至る所に勢力をもったのである。こうした勢力は、郷紳階層の世界とは別に下層民衆が生きる空間を成りたたせていた[11]。

Ⅲ　中国の社会変容に関する試論的枠組み

以上にあげた「分化を通した統合」の他、①過剰人口、移住・移動の高さ、②家産の均分、③権威は系譜関係の中に継承されない、権威の脱中心性、④平等主義、大同主義、⑤社会構成の多層性、社会権力の多元性などの特徴は、中国社会に構造的なダイナミズムをを与えているのではないだろうかと考える。先に記したように、これらの項目はあくまでも日本人のわれわれが中国社会を見たときに注意を引かれる点にすぎない。しかし、日本人の目を通して捉えられる中国社会の構造的な特徴をよく表現しており、日本社会との比較の中で中国社会を動態的に理解する鍵となるのではなかろうか。中国におけるダイナミズムの構造を概念化することで、日本社会の構造を考察する対照点、あるいは日本のダイナミズムを考察する道筋を得ることができるのではないかと考える。

以上の構造的な特徴から、中国社会の変容を考察する試論的枠組み（discursive framework）を構成するなら、どのようなものが可能であろうか。「伝統」の（少なくとも一九三〇年代に見られた）構造原理が、現代中国社会の構造の中にどの様に組み替えられ、新しいエネルギーを賦活させているか、という視点から考えてみよう。この場合、

「伝統」（一九三〇年代）の構造が持続するという面ばかりでなく、どの局面がどの様に変化するか、あるいは新しい機能をおびて組み替えられるか、という視点から考える必要があろう。まず、起点となる枠組みを試論として以下の図のように示してみよう。

「中軸構造」は、中国社会の構造を貫いている秩序のあり方、あるいは、秩序を支えている構造原理を示そうと考える。「基層社会の構造原理」は、人々が生きている社会単位とその構成原理を示そうと考える。この二つの軸が交差するところが、人々の現実に生きる論理だと考えてみよう。

それぞれの軸に三つの柱をたてたが、これは対象に接近するための予備的な枠組みとして仮に設定したものに過ぎない。従来の中国社会に関する言説をまとめてみると、このように整理することができるという程度のものである。まずは、こうした仮説的枠組み（discursive framework）を設定することによって、資料を収集する準拠点としよう。この意味では、調査研究の出発点、対象に向き合うための姿勢と着眼点を明示してみるという試みなのである。この試論的な枠組みにたって、伝統的家族・親族と村落社会の変容をどのように見ることができるであろうか。

現代の中国村落を考える上で、手がかりとなるモノグラ

対象を捉えるための試験的枠組み（discursive framework）

中軸構造（原理）
- 分化による統合
- 均分主義
- 多層性・流動性

基層社会の構成原理
- 家族親族：父系親族原理
- 集落：本地人と外地人
- 絆の有り様：差序格局

フが二編出ている。一つは張楽天（Zhang, Le-tian）の『告別理想―人民公社制度研究』（東方出版中心、一九九八年）と折暁葉（Zhe, Xiao-ye）『村庄的再造―一箇〝超級村庄〟的社会変遷』（中国社会科学出版社、一九九七年）である。前者は、人民公社制度の設立から解体までの経過を、政治、経済、文化、社会の全体から描いたものである。筆者がとくに強調する点は、現在の村落社会が行政村として、組織、人員、経費負担において、一つの独立した社会単位となっている姿である。上級の政策を実行するばかりでなく、村落の社会生活の運営すべてに責任を持つ。政治的に、そして社会的にもガッチリとした枠組みを持つが、その基本的な構造は人民公社の経験から成りたっていることを論証している。

後者は、香港に近い広東省の村落社会のモノグラフである。耕地が工場用地として開発され、元来の村の人口二〇〇〇人に対して外来者が五万人にも急増した村の姿を記述する。当村では、土地が地代として巨大な利益を生むばかりでなく、蓄積された資本で工場の誘致や他村の工場用地の開発まで手を伸ばしている。村内には外来者のための住宅や大きな商店が並び、農村としての景観はもはやない。こうした脱農村を経験しながら、しかし、「本地人」（本村人）は利益を「外地人」（外来者）にもらさないために、両者の間に画然とした格差をつけている。村の限られた空間の中に、「本地人」の住む社会と本村に住む「外地人」との格差を固持した二重構造を出現させているのである。

このような事実を、どのように考えたらよいのであろうか。村が社会生活の単位であるばかりでなく、行政単位として村民委員会を選出し、経常経費を負担している姿は、解放前の中国村落とは大きな相違である。旗田巍が「華北の村落では、多数の農民を含めた団体的協同事業は少なく」、「防衛的消極的協同」がみられるのみだと記述した（1973：176）構造と、どのように連続するのであろうか。また、折暁葉が報告した利益を共有する「本地人」と排除された「外地人」との歴然とした格差は、中国村落の構造とどのように関連するのであろうか。

家族関係をみると、土地改革と文化大革命によって、家族と親族の基盤は弱体化したといわれている。もはや、村落の社会生活の基本的集団としての機能を予想することは難しい。また、妻方・母方の親族ネットワークが、現実の社会生活では比較的重要になっているという報告もある。[12] しかし他方では、文化としての家族主義の存続（王滬寧、一九九一）、あるいは、社会的威信の象徴としての家廟の再建と祖先祭祀の復活という報告もある（王銘銘、一九九七）。男系親族ネットワークの脆弱化、妻方・母方親族への依存の強まり、そして家族主義の存続や象徴としての祖先祭祀の復活など、これらの複雑に絡まった事象は、どの

ような方向に向かおうとしているのであろうか。

以上、現代中国の村落生活へのいくつかの関心が提起されるが、まずは、先の試論的な枠組みを提示することで、研究の全体的な見通しを立ててみることから始めなければならないのではないかと考える。

註

（1）毛利和子を代表とする七〇人近い中国研究者による共同研究の成果が、二〇〇〇年一月から『現代中国の構造変動』全八巻として出版され始めた。毛利和子の紹介では、「中国に構造変動は起こっているか、だとすればどのような構造変動か」（「刊行にあたって」）を中心テーマとしたとある。

（2）文部省科学研究費による共同研究「現代中国の産業化における基層文化の変容と展開」として、一九九七年から九九年にかけて調査研究した。成果の一部は「中国村落社会の構造変容―三河市燕郊鎮馬起乏村を事例として―」（神戸大学文学部『五十周年記念論集』二〇〇〇年三月）として紹介した。

（3）個々の文献の紹介は末成道男編『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会、一九九五年に詳しい。

（4）川田順造「文化としての身体技法」川田順造編『ヨーロッパの基層文化』岩波書店、一九九五年、所収。

（5）戒能通孝「支那土地法慣行序説―北支農村に於ける土地所有権と其の具体的性格」東亜研究所『支那農村慣行調査報告書』第一輯、一九三三年。平野義太郎「北支村落の基礎要素としての宗族及び村廟」東亜研究所『支那農村慣行調査報告書』第一輯、一九三三年。

（6）佐々木衛「中国社会研究と日本社会学」佐々木衛・松戸武彦編著『社会学研究シリーズ　中国社会研究の理論と技法』文化書房博文社、一九九九年。

（7）佐々木衛「中国の民間宗教集―構造的特性について」『民族学研究』五三巻三号一九八八年。

（8）佐々木衛「近代中国の商家の経営と家族構造」『山口大学文学会志』第四二巻、一九九一年。

（9）Yang, C. K. 1961, *Religion in Chiese Society : A Study of Contemporary Social Functions of Religion and Some of Their Historical Factors.*, University of California Press.

（10）溝口雄三「中国における公・私概念の展開」『思想』六六九号　一九八〇年三月号。溝口雄三「中国の『公・私』」（上・下）『文学』一九八八年九月号・一〇月号

（11）佐々木衛『中国民衆の社会と秩序』（東方書店、一九九三年）に所収された論考は、近代中国社会の多層性を下層民衆の世界から記述している。また、Siu, Helen は伝統的村落社会の権力基盤は、親族、民間宗教、郷紳階層など多元的であったが、革命後は共産党による国家権力が村落に直接関与するようになって、権力基盤は一元化したと論じている（1989, *Agents and Victims in South China : Accomplices in Rural Revolution.*）。

（12）Chen, Myron L. は台湾の事例研究から、農作業や村外に出かける商売では、妻方・母方親族の機能が大切になっている事

実を指摘した（一九七六）。また、Yan, Yunxiangは、贈り物の交換という事項から妻方親族ネットワークの重要性を報告した（一九九六）。